

\*\*\*\*\*

## 京教竹友会

～竹の可能性を掘り起こせ！～

\*\*\*\*\*

### 第1章 プロジェクトの概要など

1. 京都教育大学竹友会では2019年4月～2020年1月まで研究を行った。

- ・京都教育大学および近辺の竹を用いて、活用方法を研究する。
- ・竹を用いた活動を通して地域との関わりを深める。
- ・周辺地域の活性化を図る主体的かつ持続的な活動を目指す。

2. 代表者および構成員

・代表者

丸山 大輝 理科領域専攻 3回生

・構成員

東谷 隆誠 発達障害教育専攻 4回生

菊池 愛海 数学領域専攻 3回生

木原 菜穂美 技術領域専攻 3回生

小松 明日香 技術領域専攻 3回生

田中 美帆 技術領域専攻 3回生

春名 風我 美術領域専攻 3回生

江頭 未来也 社会領域専攻 2回生

仙波 隼人 数学領域専攻 2回生

森田 大智 数学領域専攻 2回生

高矢 和希 技術領域専攻 2回生

長谷川 千華 技術領域専攻 2回生

小笠原 詩編 技術領域専攻 1回生

谷所 裕介 技術領域専攻 1回生

計14名

3. 助言教員

原田 信一 技術科教育教授

浜田 麻里 本学国文学科教授

4. 協力団体及び協力者

・南山 泰宏 教員

大阪府立園芸高等学校環境緑化科

本学環境教育実践センター専任

・深草おやじの会

・京都市環境保全活動センター 京エコロジーセンター

・びあびあコミュニティサポート合同会社

・京都教育大学附属京都小中学校

・公益財団法人 亀岡市環境事業公社

・亀岡市立大井小学校

・国際交流サークル FIRA

・近畿大学ボランティアサークル FeeLink

### 第2章 内容や実施経過など

1. 大岩神社竹製遊具制作

日程：2019年4月14日・5月12日

4月14日、大岩神社にて深草おやじの会との共同で竹製遊具の設置を行った。4月14日に竹の切り出し、遊具の組み立てと設置を行い、5月12日に地域の児童を招いて、簡易な催しものを開いた。本企画では、竹ブランコ、竹ぽっくり、竹馬を制作した。写真1は実際に制作した竹ブランコの写真である。



写真1 大岩神社竹ブランコ

2. セタイベント

期間7月上旬～8月中旬

(1)セタシーズンに合わせて、大学生協購買部前に笹飾り(写真2)を設置した。短冊に願い事を書き、笹飾りにさげられる体験ができる空間をつくりだせ

るよう努めた。



写真 2 セタの笹飾り

(2) 昨年度に引き続き、留学生の方々に日本の夏の風物詩である「流しそうめん」を体験してもらうためのイベントを、7月11日に国際交流サークルFIRAと連携して流しそうめん大会とセタ企画を行った。写真3は流しそうめんの様子である。流しそうめん大会では、一般的な薬味の他にも、キムチなどの様々な国の料理や調味料を使用し、流しそうめんを通して異文化の交流を行った。セタ企画では、約3メートルの笹飾りを準備した。短冊に願い事を書いてもらい笹に飾った。



写真 3 流しそうめん大会

### 3. 深草の竹で遊ぼう！ 竹風鈴

日程：8月15日

8月15日、京エコロジーセンターにて、「深草の竹で遊ぼう！」というイベントに、竹風鈴のワーク

ショップで参加した。

写真4の竹風鈴は、京エコロジーセンター刊行のチラシやHP、FaceBook、情報誌「GoGo 土曜塾」2019年7・8月号に実際に掲載された写真だ。準備作業は6月下旬から始まり、風鈴の基部となる割竹と、長さの異なる竹を100人分用意した。イベント当日には、写真4の竹風鈴に使用されている部分が麻縄に置き換わり、風鈴の基部に糸を通して吊り下げられる状態にして提供した。イベントは大変盛況であり、用意した人数分を超える想定外の参加人数で、急遽20セット追加作成し乗り切った。イベントには、ニュース番組の取材も入り(写真5)、参加者の児童にインタビューがされていた。



写真 4 チラシに掲載された竹風鈴



写真 5 竹風鈴ワークショップの様子

### 4. 向日市竹結びフェスタ

日程 10月13日

向日市にある洛西竹林公園にて行われた竹結びフェスタに、竹を曲げて制作した竹トンネル(写真6)



を設置した。夜にはイルミネーションや白熱灯を付けて、光の道を生み出した。(写真7) 曲げたい箇所を加熱することで、強度を保ちつつアーチを作り出すことが可能となった。竹結びフェスタは、10月12日からの予定であったが、非常に強力な台風が最接近していたために、10月13日のみの開催となった。



写真 6 竹トンネル



写真 7 竹トンネル 夜の様子

## 5. 城陽緑化フェスティバル

日程：10月27日

近畿大学学生団体近畿大学農学部 FeeLink と共同して、木津川運動公園に高さ約10mの竹ブランコを出展した。10月26日に木津川運動公園付近の竹林から竹を切り出し、設営場所に運搬し、仮組みを行った。前年度同様、竹友会の名目での出展ではなく、FeeLink に対しての竹の切り出し方、さばき方、設営の仕方等の技術を提供するかたちで連携した。設営場所は、漕ぎ出す方向が斜面になっており、躍動感や爽快感が楽しめるため参加者にコメントを頂いた。イベント参加者の児童に盛況で、常に10分待ちの状態、長蛇の列ができていた。(写真8)



写真 8 竹ブランコと児童の列

## 6. 留学生向けミニ門松づくり

日程 12月16日

12月16日に留学生の方を対象に、日本の正月文化である門松を作り、日本文化に触れると共に、竹に興味を持ってもらうことをコンセプトに国際交流サークル FIRA と連携してミニ門松づくりを行った。両団体の都合上、参加人数が非常に少なかったが、イベントそのものは滞りなく運営することができた。

## 7. たけでコップとおはしをつくろう！

日程：12月18日

亀岡市立大井小学校で、小学2年生の計58名に向けて、竹を用いた食器づくりのワークショップを行った。(写真9)

2年生ということもあり、刃物や、鋭利なものは使用できないという制限の中で、竹を使用したコップづくりを行うことができた。お箸や、コップの飲み口は、紙やすりを使用することで、刃物の代わりとした。(写真10)



写真 9 ワークショップ 写真 10 作業の様子

## 8. ミニ門松づくり

日程：12月18日

京都教育大学附属京都小中学校7～9年生D組25人を対象にワークショップ形式でミニ門松づくりを実施した。

児童生徒自身に竹を切ってもらったところからしてもらい、ものづくりの楽しさを体験できるイベントを催した。ミニ門松に使用する竹や、装飾は全て京都教育大学内で見繕い、準備した。

1人1対(2個)作り、門松についての文化や歴史について説明する講義も少しながら行った。

本イベントを成功させるにあたって、京都教育大学附属京都小中学校の先生に協力して頂き、楽しくて体験的な学習となるよう務めた。

## 9. 門松づくり

日程：12月24日・12月27日

日本の伝統的な正月飾りである門松についての知識を深め、実際に作ることで、竹友会メンバーの技術向上を図ると共に、京都教育大学藤森学舎正門前に門松を飾ることによって、竹友会の活動をより多くの人に知ってもらうことや、沢山のの人に竹に興味・関心を持ってもらえる機会の提供という目的で、高さ約180cm、幅約100cmの門松を1対制作した。

(写真11、写真12)12月27日に門松を設置し、2020年1月16日に撤去した。



写真 11 門松(左)



写真 12 門松(右)

## 第3章 結果や成果など

### 1. 大岩神社竹製遊具制作

当活動では、竹友会メンバーの技術向上と、技術授受も兼ねており、下回生のみで遊具制作にあたり、上回生は全体の指揮やおやじの会との取次を行った。大岩神社内には、非常に立派に育った孟宗竹が無数にあり、切り出す竹の選定・組み方等の難易度も高かったが、メンバー同士の連携が良く、難無く作業を行っていた。下回生は技術が未熟ということもあり、写真1の竹ブランコは梁(天井にあたる部分)の位置が本来あるべき場所より移動していた。その為、写真1の竹ブランコは右肩下がりに梁が傾いている。竹ブランコの全長が小さければ小さいほど、梁の傾きの影響が顕著に表れてくる。実際に写真1の竹ブランコを漕いでみると、左側(梁が落ちている方)に回転していくように弧を描いていた。一方で児童からは、横に回転するブランコは初めてだと、写真1ブランコの魅力となっていた。

ブランコ以外の遊具も人気を博した。竹馬は、大人が使用しても壊れない強度となっており、大学生や保護者が使用している印象が強かった。

### 2. セタイイベント

(1) 笹飾りは、撤去する8月中旬には、溢れんばかりの短冊でいっぱいになっていた。利用者がSNSで発信することで、大きな宣伝になった。

(2) 国際交流サークル FIRA との流しそうめん大会では、留学生の方々に楽しんで頂けた。流しそうめんの台は全長約5mであったが、大きさに感動して写真を撮る留学生の姿がよく見受けられた。流しそうめん後の笹飾りには、沢山の言語で書かれた短冊でいっぱいとなった。留学生の方々に流しそうめん、笹飾りどちらも興味を持って頂くことができ、日本の夏の文化を伝えることができた。

### 3. 深草の竹で遊ぼう！ 竹風鈴

深草の竹で遊ぼう！では、児童に竹を切る体験や、竹に穴を開ける体験、自分で音色を考えながらオリジナルリティのある作品を作る体験ができるイベントを目的に実施した。のこぎりやハサミを使用する為、安全面を考慮して保護者同伴を必須にしたり、参加



者全員分の手袋の準備をしたり、スタッフが参加者一人一人に目が行き届くように、一回の参加者を先着20名にしたりして、午前2回、午後3回の5回行った。また、当初100名で予定しており、それに合わせて材料を用意したが、受付に長蛇の列ができており、昼休憩時に急遽追加20セットを制作した。最終的に準備した120セットの竹風鈴は全て使用した。

1時間で全行程が終了するように設定した上でどこまで児童が体験できる幅を増やすのかを京エコロジーセンターと何度も会議し当日を迎えた。しかし、作業が多く、午前中の2回は1時間で終わらなかった。午後からはある程度はスタッフが行うことで時間短縮を行い1時間に収めることができたが、児童のやりきった感や楽しかったという感想は、午前中の方が沢山頂けた。

#### 4. 向日市竹結びフェスタ

当初予定していた10月12日は、非常に強力な台風19号が最接近していたこともあり、中止となった。

竹トンネルは、夜になるとライトアップされ、入り口とイベント会場をつなぐ照明と道の二面で活用された。竹トンネルのところどころには、案内板を設置したが、この案内板もびあびあコミュニティサポート合同会社からの要請があり、竹で制作した。

(写真13)案内板用の竹には中にLEDライトを入れて点灯させることで、矢印が光って見えるようになっている。

ライトアップは18時からで、イベントも21時に終わりを迎えた為、ほんの数時間しか幻想的な空間を演出することができなかったが、イベント参加者からは評価は良かった。



写真 13 案内板用の竹

#### 5. 城陽緑化フェスティバル

城陽緑化フェスティバルでは、近畿大学 FeeLink と共同して竹ブランコ設営を行った。木津川運動公園のイベントで、今まで幾度となく竹ブランコを出展してきたものが好評であった為、竹ブランコを目当てにやってくるリピーターの方も多かった。近畿大学 FeeLink は環境問題に取り組んでおり、竹に関する環境活動（竹林整備等）も手掛けている。本年度も、経験や知識を交換できる良い交流の機会となった。

#### 6. 留学生向けミニ門松づくり

本年度も国際交流サークルと協力して、日本の正月の風物詩である門松を手作り体験できる機会を設けた。ただ作るのではなく、門松はどういうものなのか、門松にはどういう歴史があり、どんな意味を持つのかを講義的に伝えた上で、制作に取り掛かった。

本年度は、竹友会と国際交流サークル FIRA との日程が上手く合わなかった為に、参加者が非常に少なくなってしまった。

#### 7. たけでコップとおはしをつくろう！

亀岡市環境事業公社の要請から、亀岡市立大井小学校の2年生を対象に、竹製の食器づくりのワークショップを行った。亀岡市は、現在環境問題への対策として、学校で使用する食器を自然のものにしたいという思惑があるそうで、その事業の一環としてお話を頂いた。

対称学年が2年生と低学年な為、整形・変形に使う刃物は一切使えず、ワークショップの展開に工夫を凝らした。やすりで磨くことで、捧ぐれや竹が裂けることを防ぎ、ケガをしないよう努めた。

一生懸命集中している児童は楽しそうに食器づくりを体験していた。

#### 8. ミニ門松づくり

京都教育大学附属京都小中学校にて、教育実習を経験したメンバーが、授業時間を頂いてミニ門松づくりを行った。

授業は、門松を1人1対（2個）作らせた。又、

門松の文化に関する講義も行った。門松作成では、生徒自身が自分の好きなサイズに切るところから体験させた。生徒は刃物を扱う経験が少なく、ましてや竹を切った経験のある生徒はほとんど居なかった為に、竹を切る作業が難航した。しかし、最終的には上手くまとまった。

附属京都小中学校の技術の先生と綿密な打合せを繰り返したことも授業が上手くいった要因だと考える。

## 9. 門松づくり

門松づくりは竹友会メンバーの技術向上、日本文化である門松を作ることで体験的に学び、ものづくりの楽しみに気付くと共に、竹友会の活動をより多くの人に知ってもらうこと、竹に興味をもってもらうことを目的に行った。

門松が伝えられることは、門松の持つ歴史的な背景や、植栽の縁起、由来などの文化的なこと、植栽のつけ方によって、門松には無数の表現ができるという美術的なこと、そぎ切りや節のどの部分で切るのかという技術的な3つの観点を伝えることができた。正門に飾ったために、通りがかった沢山の人が足を止めて門松を眺めていた。

## 第4章 まとめと反省、今後の展望など

### 1. 大岩神社竹製遊具制作

大岩神社内に竹製遊具を制作し、地域の児童に楽しんでもらうという目的は達成することができたが、写真1の竹ブランコは、設計に欠陥が見られる作品で、安全面は十分に配慮しているとは言え、作品としては問題点が非常に大きい結果となってしまった。以降8月までは、竹友会メンバーの技術向上を最優先事項に考え活動していった。

しかしながら、斜めに回るのであれば、それを売りにすれば良いと逆転の発想から、ロープを絡めてその場で回転させたりして、本来のブランコではできない遊びを見つけて児童に提供していった。児童からは大変好評であったために、複数ブランコを建てる際には、1つくらい変形したブランコがあっても良いのではと新たな気付きが得られた。

### 2. セタイベント

笹飾りは大変盛況であるが、後始末に困る。本来であれば笹ごと燃やすことで、祈りを天に届かせるのだが、なかなか巨大な笹を燃やせる場所がない。本年は仕方がないが、小さく切って中が見えないビニール袋に入れて捨てたが、捨て方にもう少し工夫を凝らしたいところである。

流しそうめんは国際交流サークル FIRA の夏の活動で人気となっているそうだが、同じく竹友会でも人気のイベントとなっている。どうせなら、お箸も竹製だとより楽しめたという意見を留学生の方から頂けたので、参考にしたい。

### 3. 深草の竹で遊ぼう！ 竹風鈴

竹の可能性を発掘するため、また、竹の魅力を伝えるために行った竹風鈴ワークショップは大成功に終わった。竹風鈴の制作は、竹友会として初の試みで、上手く音が鳴るように、音色が変わるように、材料に工夫を凝らした。

深草の竹を用いたイベントを行うと決まった際に、真っ先にお声がけ頂き、沢山の団体や人に竹友会の活動を認知して頂いていること、評価して頂いていることに感謝しかない。そんな周囲の期待もあつての竹風鈴ワークショップ。運営に際して、京エコロジーセンターの職員の方々には宣伝、整列等多大なご協力を頂いた。我々竹友会のワークショップであるので、もう少し自立して、竹友会だけで運営できるような力や連携が無かった事が残念だ。緻密な打合せはしていたが、現場で臨機応変に立ち回れる応用力は、下回生メンバーだけでは一抹の不安が残る結果となった。

イベント自体は、大変盛況であったが、その反面、ワークショップを体験できない児童も何組かいた。ありがたい悩みではあるが、しっかりと対策を練っていききたい。

### 4. 向日市竹結びフェスタ

昨年に引き続き、お呼びしていただけたことは非常にありがたい。本年度は、昨年の自立式竹ブランコではなく、幻想的なイベントそのものをプロデュースする側への依頼であった。入り口とイベント

会場をつなぐ竹トンネルは試行したことがなく、試作するまではまったく未知の領域であったが、どうかトンネルと言える作品まで仕上げた。

また、本イベントは、台風という不測の事態に陥り、設営時間が大幅にカットされたり、本部と竹友会との間で連絡が上手くつかなかったり等、連携が上手くとれないイベントであった。その中でも主催者の意図や事前の打ち合わせから、迅速に行動できたことは大きく評価できる部分だ。

## 5. 城陽緑化フェスティバル

城陽緑化フェスティバルでは、竹を扱う竹友会と、環境教育や食農教育など幅広く自然を相手に活動している近畿大学 FeeLink が互いの活動を交流しつつ、環境保全の大切さや、竹の可能性を伝える活動ができた。昨年一緒に活動したメンバーがどちらの団体にもいたことから、連携が上手くいき、想定以上の効率で準備を行うことができた。一方で、巨大竹ブランコを立ち上げる際に、竹友会メンバーの指示が的確ではなく、立ち上げに3度失敗した。昨年とは違い、斜面に設置を試みた為に、立ち上げの難易度が数段難しくなっていた。しかしながら、幾度と竹ブランコを立ち上げてきた竹友会としては見つともない姿を見せた形になった。竹ブランコについてまだまだ研究の余地があるということを改めて思い知らされた機会となった。

竹ブランコは常に長蛇の列を作り、沢山のお客様に満足して頂けた。参加者の中には身体的障がいのある方もおられたが、竹友会メンバーが補助に入り安全面に十分配慮しつつ楽しんで頂けた。ブランコに乗るのは久しぶりだったと笑顔で語ってくれた姿は非常に印象的だった。しかし、運営に際して当日3人しかおらず、竹友会メンバー1人にかかる負担が非常に大きく、運営に関して改善すべきだと感じた機械だった。

## 6. 留学生向けミニ門松づくり

前年度同様、日本文化に触れながらの手作り体験は留学生にとっては新鮮で印象に残る経験であったと感じている。本年度の当イベントでは、竹友会と国際交流サークル FIRA との日程が合わず、参加人

数や、対応人数がかなり少なかったことは最大の問題だ。最低でも2ヶ月前にはお話を頂ければ、イベントを運営していくことは難しいと感じる機会となった。

## 7. たけでコップとおはしをつくろう！

一昨年、一緒にイベントを行わせて頂いた亀岡市環境事業公社から、亀岡市立大井小学校での竹の食器づくりワークショップのお話を頂いたところからスタートした。

低学年の為に刃物は使えないが、食器を作りたいという要請は非常に難しく、竹を加工・整形する際に必ずどこかのタイミングで刃物を使用することとなる。しかし、当ワークショップを担当した者は、主免実習を終えたメンバーで、予め粗くカットして、やすりで削る工程のみを残すという方法を編み出し、ワークショップを行った。やはり実際にやすりで削る体験は印象に残った様子であった。

## 8. ミニ門松づくり

中学生の都合を考慮して、平日の水曜日に行ったこともあり、1回生、2回生の参加は難しかった。また、3回生も同日行われていた亀岡市立大井小学校でのワークショップに応援で行っていたり、インターンシップ実習があつたりして、ミニ門松づくりを担当したメンバーが非常に少なかった。その為、人員不足により、作業時間が間延びしてしまった。

ワークショップの内容としては、当初から予想していたことではあるが、生徒が竹を上手く切ることができなかった。しかし、このワークショップでは、そのなかなか切れないということも込みで体験してもらいたかったので、大方予想通りの展開で終えることができた。

## 9. 門松づくり

大学正門に設置する門松づくりに関しては、これまでの活動してきた中で得たノウハウや磨いてきた技術を最大限披露する、腕試しのような活動に位置付けて取り組んだ。1年間竹を切って、様々な作品に加工する中で学んできたことを存分に発揮した。

竹を切り、植物を剪定し、飾り付けるという3つ

の工程は、加工技術、美術的要素、工夫を試される、正に1年の締め括りに相応しい作業であった。

今年は、全て本学内にある自然だけで完結させようと試みた。そうしたところ、竹の太さが十分のものを見繕うことができず、細い竹を使用することとなった。その分、周囲の植栽を工夫することで伝えたいことを表現する表現力が試される機会となった。

地域の方や学生、職員からの評判は好評で、特に地域の方からは毎年続けて欲しいとの声を沢山頂いた。竹友会という団体が地域に愛され親しまれていることを実感したと共に、注目されているということも意識して行動していかないといけないと、気を引き締め直す良い機会になった。

#### ・今後の展望

まずは、2019年夏に盗難被害に遭ったことにより、多方面に多大なるご迷惑をお掛けした。これは一重に竹友会の会としての規律の甘さ、メンバーの意識の低さに起因したものであり、現在では対策を打ち、再発しないよう尽力している。

竹を用いた活動も4年目ということもあり、地域住民や沢山の団体にも竹友会の名前が知れ渡り、昨年度以上に多くの方々からイベントの参加を持ちかけられるようになった。しかしその都度顕著に表れる問題として、人手不足の深刻化がある。確かに昨年度と比べるとメンバー数は増えてはいるものの、実際に活動に来てくれるメンバーはほんの数人である。どのように作業人数を増やしてくかが一番の課題である。また、本年は実際に行おうとして中止になった企画が1つあった。京都市美術館でのプロジェクトマッピングに、竹灯籠を出展するという企画である。京都市と京都岡崎魅力づくり推進協議会と共同して動いていた企画だったが、竹の運搬の問題（相手側の、トラックの手配が出来ていなかった）や、竹灯籠に使用する備品の盗難被害に遭い、時間的にも現実的にも実施することが困難になったために協力者という形でイベントを迎えた。時期的にも人員的にも厳しい状態であり、引き受けるイベントの選考基準を改める必要があると実感している。

本年度は非常に沢山の団体と連携することができ、

様々な角度から、竹についての魅力を伝えていくことができた。しかし、創設したメンバーが卒業している為に、技術の低下が著しく、とてもイベントを行えるような状態でない時期もあった。次年度以降の会の存続は未定であり、本年度で竹友会は解散となるかもしれないが、竹友会メンバーはこの1年を通して様々な角度から、竹と向き合ってきた。その中で沢山の技術を覚え、意欲的に活動しているメンバーもいる。竹友会メンバーがこれから先、この1年間で磨いた技術や知識を使用して、竹の魅力を伝えていくことを期待している。

竹友会として、この1年を通して得た、人と人とのつながりを大切にし、より多くの人とつながっていき、活動の幅を広げていきたい。また、まだまだ竹にはさまざまなものを生み出せる可能性があり、そのものづくりへの探求を続けていきたい。加えて、今後はさらに沢山の団体に知ってもらいつつ、時には他団体との協力を意識して、より多くの人々に楽しんでもらえるような活動作りの実現を目指していく。